

シーニックバイウェイ北海道活動が関係者間の協働と意識に与えた影響*

The effect on the collaboration and attitude of the persons concerned with Scenic Byway HOKKAIDO*

石田東生**・市橋堯行***・岡本直久**・堤盛人**・小川華奈****

By Haruo ISHIDA**・Takayuki ICHIHASHI***・Naohisa OKAMOTO**・Morito TSUTSUMI** and Kana OGAWA****

1. はじめに

シーニックバイウェイ北海道（以下、SBW）は、みちを場として地域住民と行政が連携し、沿道の景観形成を通じて地域づくりや観光づくりを行う新しい市民参画型みちづくり・地域づくりである¹⁾。このSBWは、対象範囲が市町村の枠を超え広範囲にわたり、属性の異なる様々な主体が関わっていることから、空間的にも属性的にも今までの地域づくりとは異なる。一方で、広範囲で様々な主体が関わることから、主体間・地域間・分野間連携や信頼関係の構築が非常に重要である。

また、これまでに地域住民等の声を計画に反映する「市民参画型まちづくり・みちづくり」が盛んに行われ、その中で意識の把握に関する研究が行われている。しかし、既存研究では対象者の属性が限定され、従来から地域づくり等に従事してきた行政側の意識の把握はほとんど行われていない。そこで、SBWによって地域住民側と共に行政側の意識にどのような影響が生じたか探ることは、今後の同様の取り組みを行う上で重要な視点と考えられる。

そこで、SBWを対象に、SBWが関係者間の協働や意識に与えた影響をアンケート調査によって明らかにすると共に、SBW活動が人々の意識や態度に与える有用性を明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 本研究の概要

(1) 本研究の視点

a) まちづくりや景観における社会的ジレンマ問題

まちづくりや景観形成における問題の多くは、短期的・個人的には利益になることが長期的・社会的には不利益となってしまうという社会的ジレンマ構造を持つ。そこでは、問題の重要性が認識されにくい、あるいは重要性は認識しているが、解決のための行動には繋がりに

*キーワード：意識調査分析、景観、市民参加

**正会員、工博、筑波大学大学院システム情報工学研究科（茨城県つくば市天王台1-1-1、TEL&FAX：029-853-5591）

***学生会員、筑波大学大学院システム情報工学研究科

****非会員、東京大学大学院工学系研究科（東京都目黒区駒場4-6-1）

くい部分があり、問題の解決が難しくなっている。そこで、人の意識に働きかけ問題の重要性を認識させる、あるいは行動しようという気持ち（行動意図）を持たせることが問題の解決に繋がると考えられている²⁾。

b) Social Capital（ソーシャル・キャピタル）

近年、『人々の協調行動を活発にする事によって社会の効率性を高める事のできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴³⁾』と定義されるSocial Capitalという新しい概念が注目されている。このSocial Capitalは、市民活動の活性化を通じて培養される可能性があることから、地域住民等と行政が協働でまちづくり等に参加することによって、ネットワークが強化され、信頼や規範が醸成される可能性がある。特に、SBW活動は、人的ネットワークを重要視して活動が行われていることから、関係者間に与えた影響として着目すべき視点ではないかと考えられる。

c) 関係者間の協働と意識に与えた影響の留意点

SBWに参加している活動団体と関係行政機関等は参加形態に明確な違いがある。それは活動団体にとっての参加は、「自主的な参加」である一方で、関係行政機関等は「仕事としての参加」である。つまり、活動団体は個人の人々の興味・関心による参加に対し、関係行政機関等の人々は、個人の興味・関心など関係なしに参加しているのである。ゆえに、連携・協働の影響を測定する際は、活動団体は個人の意識、関係行政機関は個人の意識より仕事への意識に比重をおいて分析する必要がある。

(2) SBWが関係者間に与えたと考えられる影響

このような連携・協働が関係者間に与えた影響として、まずSBWへの参加によって様々な主体の人々が人・もの・情報とつながりを持つ。このつながりによって、個人に対してSBWへの認知・理解・共感をもたらす。その結果として、もの・情報とのつながりによる影響として「まちづくり・地域づくりに対する意識」、人とのつながりによる影響として「コミュニケーションの機会（手段と頻度）」、「連携に対する意識と信頼感（Social Capital）」が考えられる。

3. アンケート調査の概要

(1) 仮説の設定

人・もの・情報とのつながりが多いほど、つまり SBW の活動に多く関わっている活動団体や関係行政機関の関係者の方が、一般の地域住民や SBW に参加していない行政機関職員と比べて「まちづくり・地域づくりに対する意識」、「コミュニケーションの機会（手段と頻度）」、「連携に対する意識と信頼感（Social Capital）」が大きくなると仮説を設定した。また、SBW の活動は地域住民と行政等との連携によって行われていることから、地域住民側と行政側の両方を対象に調査を実施した。

(2) 活動団体メンバー及び一般住民に対する調査概要

活動団体メンバーについては、本格導入に向けた制度設計のために行われたアンケート調査企画に筆者らが参加し、全活動団体を対象として調査を実施した（2004年11月11日～29日実施、配布数：152、回収数：118、回収率：78%）。一般住民については、大雪・富良野ルート内の旭川市西神楽地区の住民を対象とし、当該地区で活動しているメンバーの協力を得て、ランダムサンプリングによる家庭訪問調査を実施した（2004年12月7日～10日実施、配布数：242、回収数：238、回収率：98%）。そして、一般住民を対照群に置き、活動団体メンバーと一般住民を比較し、SBW による差異を検証する。

人・もの・情報とのつながりやつながりによる影響を明らかにするため、調査項目及び質問項目を設定した（表1）。なお、回答方法は、機会と意識は1（小さい）～4（大きい）の4段階評価、意識変化は1（小さい）～4（大きい）の4段階評価、意識変化は1（小さい）～4（大きい）の4段階評価とした。

表1 活動団体及び一般住民への調査項目・質問項目

	調査項目	質問項目
人・もの・情報とのつながり	まちづくり・景観に触れる機会	他の地域の活動について知る機会 まちづくりや景観について、「情報を得る」「勉強をする」「考える」機会
	人とのつながり	地域の人とのつながり 他の地域の人とのつながり
もの・情報とのつながりによる影響	まちづくり・地域づくりに対する意識	景観への意識、まちづくりへの参加意欲、地域への愛着（それぞれの重要性の認識と行動意図について）
人とのつながりによる影響	コミュニケーションの機会	地域の人と話す機会、他の地域の人と話す機会、行政の人と話す機会
	連携に対する意識と信頼感（Social Capital）	仲間への信頼感、行政に対する信頼感、行政を身近に感じる気持ち

表2 関係行政機関への調査項目及び質問項目

	調査項目	質問項目
人・もの・情報とのつながり	SBWに関する情報の入手手段	人から聞く話す、テレビやラジオ、シンポジウム、PR用新聞、HP、メール、会議資料、活動上の情報交換、会議への参加
	SBWの行事や活動への参加の有無	植栽活動、清掃活動、沿道景観診断、イベント地域資源の発掘調査、シンポジウム
もの・情報とのつながりによる影響	まちづくり・地域づくりに対する意識	景観への意識、まちづくりへの参加意欲、地域への愛着（それぞれの重要性の認識と行動意図について）
人とのつながりによる影響	コミュニケーションの手段と頻度	手段：メール、電話、直接話す、打合せ、会議、交流会 頻度：ほぼ毎日、週に数回程度、月に数回程度、半年に数回以下、年に数回以下、なし
	連携に対する意識と信頼感（Social Capital）	一緒に協力したい、行事に参加したい、相手への理解、身近に感じる気持ち、気軽に相談する・相談される

くなった）～5（大きくなった）の5段階評価とした。

(3) 関係行政機関に対する調査概要

関係行政機関へのアンケート調査は、SBW 推進協議会事務局よりメールにて配布、回収した。その中でも、行政・担当者は、SBW を担当している国土交通省北海道開発局・北海道・市町村等の職員及び SBW 推進協議会窓口担当者とした（2005年12月17日～26日実施、配布数：194、回収数：111、回収率：57.2%）。また、行政・非担当者は SBW を担当していない国土交通省北海道開発局等の職員とした（2005年12月17日～26日実施、配布数：225、回収数：169、回収率：75.1%）。そして、SBW を担当していない関係行政機関の職員を対照群に置き、関係行政機関の SBW 担当者と SBW 非担当者を比較し、SBW による差異を検証する。

関係行政機関に対する調査項目及び質問項目は表2の通りである。なお、回答方法は1（小さい）～5（大きい）の5段階評価とした。

4. SBW活動が関係者間の協働と意識に与えた影響

(1) 活動団体メンバー及び一般住民への影響

a) SBWによる人・もの・情報とのつながり

図1、図2より、活動団体メンバーはSBWへの参加によって、一般住民や参加一般住民よりも、他の地域の取り組みやまちづくり・景観について関わったり、考えたりする機会等が多くなると共に、人とのつながりも参加一般住民、メンバー共に大きくなっている。

b) まちづくり・地域づくりに対する意識

まちづくり・地域づくりに対する意識は、社会的ジレンマ構造を持つことから、重要性の認識を問う項目

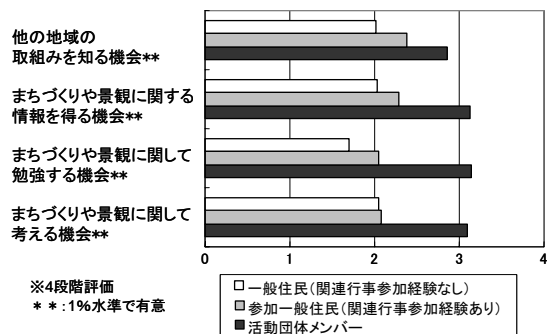


図1 地域住民のまちづくりや景観に触れる機会

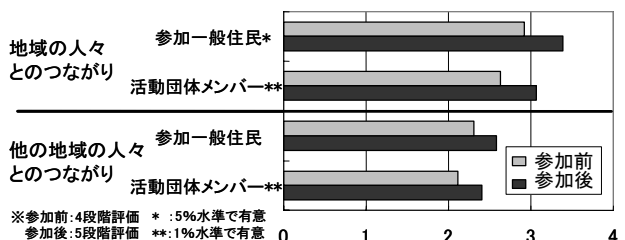


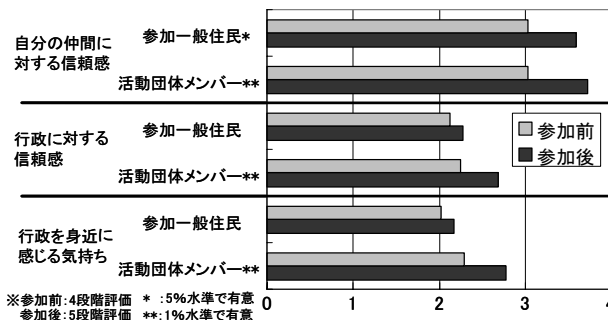
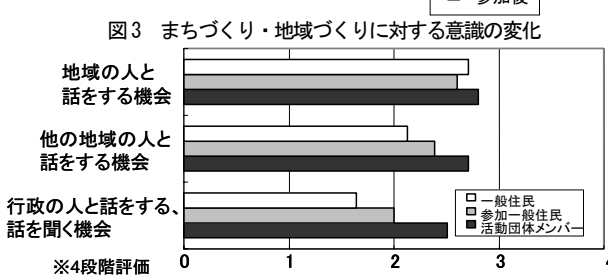
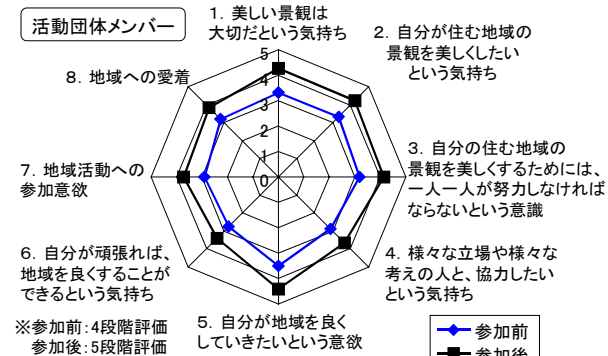
図2 参加一般住民及び活動団体メンバーにおける人とのつながり

(1~4) と行動意図を表す項目 (5~6) を設定した。回答者について平均値をとった結果 (図3の「参加前」)、行動意図が重要性の認識に比べ小さくなっていることが明らかとなった。

また「参加後」は、意識変化に関する回答結果であるが、SBWの行事参加後では、全項目において意識の向上が見られる。しかし、同様の質問を参加一般住民にも実施し、参加一般住民と活動団体メンバーとのt検定を行ったが、全項目で有意は見られなかった。このことから、両者の意識変化に差がないといえるが、参加一般住民は数回の関連行事への参加による変化、メンバーは2年間の経験を通しての変化である。よって、参加の回数や期間が違ったとしても、SBWによるまちづくりや景観形成活動等への参加によって、地域住民の地域に対する意識や関心が深まる契機になっていると考えられる。

c) コミュニケーションの機会

図4より、SBWへの参加によって、他の地域の人や行政の人など日常生活において関わることが少ない人とのコミュニケーションの機会が得られていると考えられる。特に、「行政と話をする、話を聞く機会」について、活動団体メンバーが他のグループと比べて大きくなっている。これは、SBWの活動をする上で、行政側の人々と



接する機会が多くなっているためと考えられる。

d) 連携に対する意識と信頼感 (Social Capital)

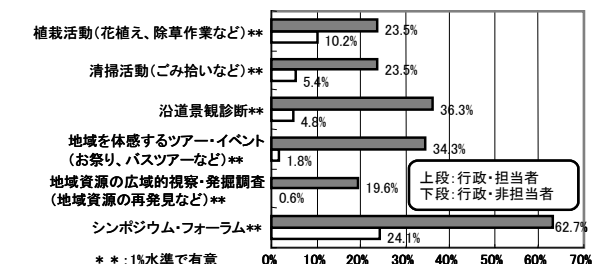
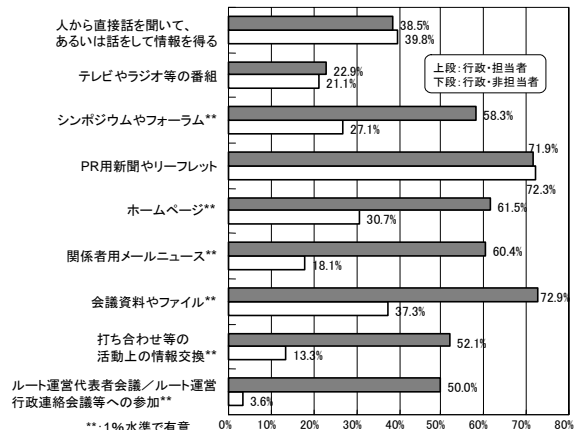
「参加前」については、自分の仲間に対する信頼感よりも行政に対する信頼感の方が、SCの蓄積が小さくなっていることがわかる。これは両者において日常生活で接する機会に差があるためではないかと考えられる。

また、「参加後」において、参加一般住民は、地域から行政というように身近ではなくなるにつれて変化が小さくなっている一方で、メンバーにおいては、身近な範囲に比べると小さいものの、行政に対する信頼感なども向上している。この結果は、行政とのコミュニケーションが増えている活動団体メンバーにおいて顕著に見られる。このことから、SBWへの参加によってこれまで身近ではなかった人とコミュニケーションをとる機会が増えることで、信頼感等が得られていると考えられる。

(2) 関係行政機関の関係者への影響

a) SBWによる人・もの・情報とのつながり

行政・担当者と非担当者の情報の入手手段を比較すると、担当者は「会議資料やファイル」が一番多く、全体的にも様々な手段からSBWに関する情報を得ていることが明らかとなった (図6)。また、行事や活動への参加有無については、全項目において、行政・担当者は非担当者よりもSBWの行事や活動に参加しており、統計的にも1%水準で有意であった (図7)。このことから、SBWへの参加によって植栽活動や沿道景観診断、イベント等への参加機会が増え、これらを通じて地域資源や地域の人々につながる機会が増えていると考えられる。



b) まちづくり・地域づくりに対する意識

図 8 より、全項目において関係者と行政・非担当者の間で 1%水準の有意が認められ、行政・担当者のまちづくり・地域づくりに対する意識が高くなっていることが明らかとなった。これは、SBW への参加によって、行政・担当者がまちづくりや景観形成活動、熱意ある活動団体の人々に触れる機会が多くなり、自分の住んでいる地域について考え、活動団体の人々と一緒に協力したい気持ちが表れているためではないかと考えられる。

c) 各主体とのコミュニケーションの手段とその頻度

この項目では、地域住民、国土交通省北海道開発局、北海道、市町村という 4 つの主体とのコミュニケーションを設定した。また、コミュニケーションとは SBW におけるコミュニケーションだけではなく、普段日常的に行われている仕事やプライベート等すべてのコミュニケーションを含んでいる。今回は 4 つの主体の中でも、地域住民とのコミュニケーションについて取り上げる。

その結果、行政・担当者は全体的にコミュニケーションの頻度が多くなっており、「メール」「電話」「直接話す」といった個別でのコミュニケーションが増えている(図 9)。このことから、SBW への参加によって、地域住民とのコミュニケーションが、SBW 以外の場面でも活発化していることが明らかとなった。

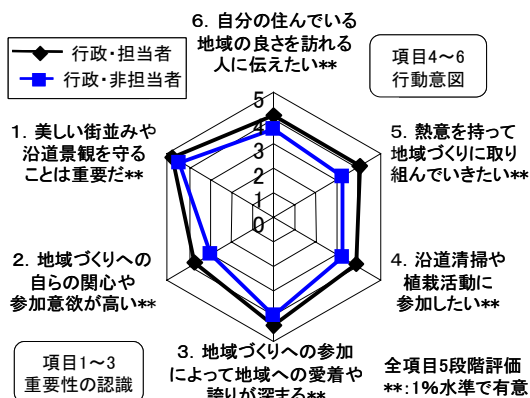


図 8 まちづくり・地域づくりに対する意識

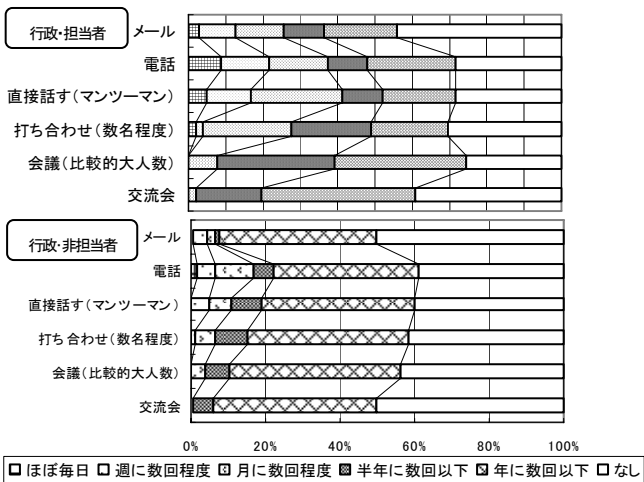


図 9 地域住民とのコミュニケーション

d) 各主体との連携に対する意識と信頼感

行政・担当者は非担当者と比べて、各主体との連携に対する意識が全体的に高くなっていることが明らかとなった。また、信頼感も同様に高くなっていることが明らかとなった(図 10、図 11)。これらの結果より、連携していきたい主体や信頼している主体はそれぞれ異なるものの、SBW への参加やコミュニケーションの活発化が意識や気持ちに表れているということが考えられる。

5. おわりに

SBW への参加によって関係者は、人・もの・情報とのつながりが多くなっていることが明らかとなった。さらに、地域づくりへの意識も向上していると共に、SBW 以外の業務やプライベートでも活発化していることも明らかとなった。そして、このことは Social Capital の醸成にもつながり、信頼感や協働意識が高まるものと考えられる。よって、現時点では地域住民と行政との連携を重視する SBW の当初の目的は達成されていると考える。

最後に、調査等の際にご協力頂いた国土交通省北海道開発局建設部道路計画課道路調査官・和泉晶裕氏、(社)北海道開発技術センター地域政策研究室長・原文宏氏をはじめ、地域住民や関係行政機関の方々への感謝をここに表す。

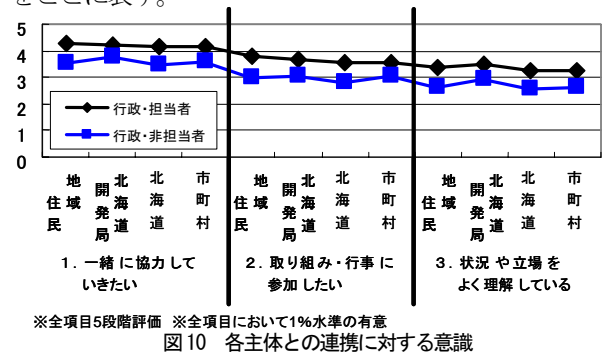


図 10 各主体との連携に対する意識

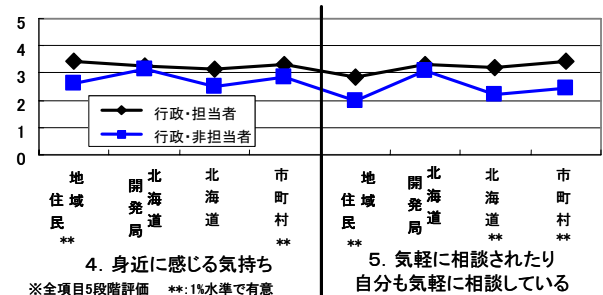


図 11 各主体に対する信頼感

参考文献

- 1) 北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会：『北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会報告書～シーニックバイウェイ北海道制度の提案～』、2005
- 2) 藤井聡：『社会的ジレンマの処方箋 都市・交通・環境問題のための心理学』、ナカニシヤ出版、2003
- 3) 内閣府国民生活局：『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』、独立行政法人国立印刷局、2003
- 4) 石田東生、小川華奈、堤盛人：『シーニックバイウェイ HOKKAIDO が地域住民のまちづくりや景観意識に与える効果』、第 31 回土木計画学研究・講演集、CD-ROM、2005